学習障害（LD）児

知能全般には問題がないものの「落ち着きがない」「記憶能力が乏しい」など行動、学習面に一部偏りがみられる「学習障害（LD）児」。この問題への無理解から、いじめや不登校を生むケースも多かった。そうした子どもたちに対する教育機関として昨年、東京にLD児専門の指導もする通級学級が誕生した。フリージャーナリスト・塩沢啓美さんからリポートを――。

中学２年のM君。小学生のころから、漢字の書き取りが極端に苦手だった。ほかの教科に問題はないばかりか、むしろ、よくできた方だけに不出来なところが目立った。

本人も劣等感抱く

友たちはここぞとばかりM君をからかい、本人も強い劣等感を抱くようになった。小学校時代は人前でおどけてみせ、友だちの歓心を買うことで、劣等感を乗り越えようとしていた。だが、中学生にもなると、そのやり方は通用しない。M君はなぜ特定の勉強だけができないのか、自分でもその理由がわからず焦るばかり。クラスから孤立しがちたった。

そのM君が毎週、教科の個別学習と情緒の安定を目的に、在籍校とは別の中学校に通い始めたのは１年前。そこで学ぶうちに、少しずつ自信を取り戻していった。M君が通うのは通級制の指導学級で、ほかに９人の生徒が他校もしくは校内から、週に１～２回通ってくる。そのうちM君を含む６人が「LD」という因難を抱えた生徒たちだ。

LD児とは、全般的な知能に問題はないものの、行動面、学習面などの一部分に特異な「偏り」や「遅れ」を持った子どもたちのこと。「集団行動ができない」「極端に成績の悪い教科がある」といった問題となって現れる。原因は中枢神経系の機能障害とみられているが、まだ特定されていない。出現率は２～３％といわれ、女子より男子に多いのも特徴だ。

LD児の概念は米国で生まれた。１９６０年代初頭のことである。その後は急速にLD児に対する認識が広まり、対応策も考えられるようになった。

対応遅れる日本

ひるがえって、日本の文部省がLD児に関して公式に動き出したのはわずか７

年前。当時、発足したばかりの「親の会」が文部省を動かした。M 君が通う学級も、地域の親の会の要望をきっかけに、６年前に実現したものだ。その実績が評価され、M 君の学級は昨年度、東京都に LD 児に主眼を置いた通級指導学級第一号として認められた。

文部省もこれまでに研究協力者会議を設け、概念の確定や、教師への啓発活動を行い、研究協力校の設置、巡回相談制度なども随時導入してきている。

偏見でいじめに発展

しかし、一般の認知度はまだ低く、教師の間にも十分に知れわたっていないのが現状。その特異性ゆえに理解されず、「少し変わった子」「扱いにくい子」と思われ、ひどいケースになると「いじめ」や「不登校」にまで発展するという。

LD 児問題に２０年以上取り組んでいる東京学去大学の上野一彦教授は「LD 児の９０％がいじめにあっている」と断言する。

LD 児に多くみられる特徴は

①「い」と「こ」の区別がつかないなど、学習上の特異なつまずきがみられる
②的外れな受け答えをし、言葉に文法的な誤りが多い
③集中力に欠ける半面、何かにひどく固執することがある
④手先が不器用で、運動が苦手
⑤人への関心が薄く、相手の表情が理解できない

――など。

これらが単独で現れることもあれば、複数が重なり合って現れることもある。では、治るのか。LD 児専門の外来を設けている東京都立梅ケ丘病院（子供の精神保健相談室　電話 03-323-1621）の佐藤泰三副院長によると、LD 児の 70%が年齢とともに少しずつ改善されていくという。これは遅れていた部分の発達や、ほかの能力による補い合いなどが起こるためだ。なかには「多動」に効く薬の投与で、かなり落ち着く場合もある。

LD かな、と思ったら、まず区市町村の教育委員会に相談するとよい。受診を勧められれば専門家などに診てもらう。その子の「偏り」がどこにあるのか、正しく見つめることが肝心だという。

冒頭の M 君の指導にあたる教諭の一人は、保護者にこうアドバイスする。「どんな子どもも、人としての尊厳という点で、何ら変わりがあるわけではない。

（LD の）診断を恐れず、その子に合った教育環境を整えてほしい」
　教師たちには――。「ほかのクラスメートに、特別な子というイメージを与えないでほしい。クラスで具体的な役割をその子に持たせ、級友たちから必要とされることが大切だ」

1997/5/28/水　夕刊掲載記事

学習障害（LD）児

　知能指数が高いのに、文字や数字が理解できない、注意力が散漫で学校の授業に集中できない。そんな学習障害（LD）児が 5 人に 1 人いるといわれる米国では、チェックするためのテスト法や、障害を克服するための教育法が発達している。その実情を米国在住のフリージャーナリスト・楓セビルさんにリポートしてもらった。

　ジョン・タッバー氏（46）はニューヨークのある CD－ROM プロダクションに働くアートディレクター。この世界ではかなり名前の知られた優秀なデザイナーだが、現在の自分の成功を形作った過去を思い出す時、いつも多少苦々しい気持ちを禁じ得ないという。

変わり者のレッテル

　知能指数も高く、他の面では普通の子供以上に活発な学童だったが、中学までほとんど文字が読めず、その結果、彼は文字を必要としないアートに専念した。この分野では期待以上の成功を収めた。今でも「自分にはこれ以外に仕事の選択肢がなかった」という思いから抜け切れないのだ。
　タッパー氏が今の米国で幼年期を送っていたら、おそらく彼の進むべき道は無数にあったろう。「怠け者」とか「変わり者」といったレッテルを張られて、学友たちからからかわれることもなかったろう。その代わりに、彼はディスレクシア（文字が解読できない障害）という学習障害を持つ児童として、特別教育や特別指導の対象になっていたはずである。
　今、米国では、ディスレクシア、ディスカリキュラ（数字が理解できない障害）、ディスグラフィア（考えを表現できない障害）、ADD（注意力散漫）といった各種の障害を含む LD 児に人々の関心が集まっている。普通かもしくは普通以上の知能を持ち、その他の面では何の問題もないのに、一、二の学科だけが

極度に成績の悪い子供たちに多い障害だ。
中には記憶力が極度に弱かったり、学友とうまく折り合えなかったり、クラスで静かにしていられないといった障害を持つ子供もいる。最近の調査によると、米国の児童5人に1人、つまり20%がこういった障害の犠牲者だと報告されている。
LDが中枢神経の中の情報伝達機能の欠陥によるものであることが米国で発見されたのは1960年代の半ばとされている。障害の中で最も問題になるのはタッパー氏のように文字を読解する能力の欠けているディスレクシアである。幸いなことに漢字のように文字そのものに意味のあるシンボル文字を使っている国の子供には少ない障害とされる。英語のように26文字が集まって作り出す言葉では、障害児は文字の組み合わせによって様々に変わる発音や意味が理解できず、単語も文章も意味をなさないことになるのだ。

公立校に指導教科も

「昔は芸術家になったりして障害を避けて通っていたようです。でも、うちの子供のように、将来は大統領になりたいという夢を持つ子供はどうすればよいのでしょう」と、8歳の学習障害の息子を持つある母親は言う。こういった悩みを持つ親たちの要請で、75年、米政府は法律で公立学校に対してLD児のための特殊教育や指導教科の設置を義務づけた。
すでに30年という歴史を持つLDが最近になって再びスポットライトを浴びてきた理由は、「テスト法や治療法が発達し”隠れた障害”が明るみに出たから」と、児童心理学を専門とする心理学者ロバート・クルガー博士は言う。事実、法律が通過したばかりの77年にはLDと診断された児童の数は80万人に過ぎなかったが、96年にはその数は240万人に上昇している。コネティカット州サウスポートにあるイーグル・ヒル校は、極度なLDに悩む児童の駆けこみ寺的な施設として有名な非営利学校だ。特殊教育に一生をかけてきた校長レン・ターバミナ氏は、この障害が今、注目されているもう一つの理由は、「これが社会的にも大きなインパクトを持つ障害だから」と話す。
「この障害の最も大きな問題は、大きな可能性を秘めた才能ある子供たちが、自信や自尊心を喪失してやる気も希望も失い、やがては人生の落後者としての運命をたどること。これは当の子供たちだけでなく、社会にとっても大きな損失です」と説明する。

14 歳前の早期珍断を

この学校の教育も目標は、子供たちに失った自信を取り戻させること。平均で子供 3.5 人に対して先生 1 人という個人指導に近い形で 2 年から 4 年の特訓を終えると、子供たちに再び普通の学校に戻ってもらうのもそのため。特殊な児童という意識を持たせてはならないのだ。
もちろん、最近の LD 児に対する関心の高さを「ちょっと行き過ぎ」と非難する学者や教育者もいないわけではない。しかし、LD の診断と矯正指導 14 歳を過ぎてからではすでに手遅れだとされている。LD に悩む子供たちが多いという事実を、忘れてはならないだろう。

1997/11/5/水